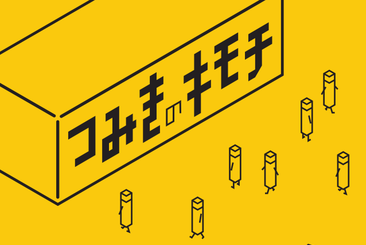


2023.7.1
vol.21

特集
利府チャレンジプロジェクトアワード2023

十符の里びと20人目
シンガー夢乃さん

From RIFU-CHO CHALLENGER
絵本サークル「りふdeおは梨」
西方日鶴さん

利府駅前tsumikiから
まち・ひと・しごとを発信

tsumiki

特集

利府チャレンジプロジェクトアワード2023

利府町まち・ひと・しごと創造ステーションtsumikiでは、開館当初の2016年度から町内の小商い事業者や市民活動団体等をサポートしてきました。さらに2022年度からの新事業として、利府町内の個人事業主、企業、プロジェクトチームなどを対象に、地域の特性を活かしたプロジェクトを募集しその優れた取組みを表彰する「利府チャレンジプロジェクトアワード」を実施することになりました。

応募総数は11件。その中から8件の応募者が、3月18日（土）tsumikiで開催された「公開審査会」にて、それぞれのプロジェクトをアピールするプレゼンテーションを行いました。
結果、次の4つのプロジェクトが優秀賞に選出されました。表彰されたプロジェクトは、特典として審査員のアドバイスやtsumikiスタッフによる個別相談などのサポートを1年間にわたり継続的に受けることができます。

今回の特集では、それぞれのプロジェクトの取り組みと審査員の講評をご紹介します。

構成・文　葛西淳子

優秀賞受賞　プロジェクトと受賞者

PROJECT

人と街をつなぐ利府トレイル

一般社団法人タンコーカナリ
石井宏之（いしい ひろゆき）さん

あたらしい観光
利府トレイルの可能性

利府トレイルを提案した石井さんは、2021年に法人を設立し、ハイカー仲間と共に町内をリサーチしながら、トレイルの普及活動を行っています。

トレイルとは、「歩く道」。森林や原野や里山などを歩く速さで旅をすることです。石井さんが語るトレイルの魅力は、自然の臨場感を五感で感じたり日常をずらす体験ができることだと言います。情報化社会の中に生きる私たちは頭を使う生活中心になりがちですが、トレイルは「日常習慣から離れ、体を使い自然の中をゆっくり歩くことによって、新たな気づきや刺激を得ることができる」と語ります。

なぜ利府町でトレイル構想に至ったのか。一番のきっかけは、青森県八戸市から福島県相馬市までの太平洋沿岸をつなぐ「みちのく潮風トレイル」を歩いたことでした。全長1,000km超の長い道を歩く中で、トレイルが人間や社会に与えるインパクトの大きさに気づき、自分が住んでいる利府で作ることができたら地域のためになると思ったのだそうです。幸いなことに、利府には豊かな地域資源があり、トレイルを作るのにふさわしい場所でもありました。

利府トレイルの暫定ルートは、全長75km程。美しいリアスの景観を持つ松島湾沿岸部と自然豊かな県民の森を一筆書きでつなぎ、林道やあぜ道、土手、廃線路、旧街道などを巡る変化に富んだ道を考えています。観光資源としても可能性があると感じています。

今後の課題は地元での「なかまづくり」。どんな形でもよいので「面白そうだ」と思ってくれる人とプロジェクトチームを作って進めていきたいそうです。利府トレイルの魅力を体感するためには「まず、一度コースを歩いてみること」を勧めています。石井さんと一緒に、歩く旅の魅力に浸ってみてはいかがでしょう。

文　佐々木将太

PROJECT

グランディ・21カフェ

Bagel&Bread spica（スピカ）
鈴木朝美（すずき ともみ）さん

グランディ・21に、
もしカフェがあったら…

「そもそも町内に私自身が足を運びたいと思えるような場所が少ないし、誰も作ってくれないので…」と仮想カフェ空間を考えたのがプロジェクトの始まりです。鈴木さんは利府町青葉台の自宅兼店舗で天然酵母と国産小麦にこだわったパン・ベーグルや、季節にあわせた焼き菓子などを販売している人気のパン屋さんです。

鈴木さんが求める空間とは、人が行き来し交わる気配がして、匂いがただよう居心地がよい空間。グランディ・21内の集いの広場は、普段から家族連れや地域の方々のいこいの場となっていますが、いまひとつ面白みに欠け、町内外の人がぜひとも立ち寄りたいという場所になっていないと感じています。

何が足りないのでしょう。飲食したり、本を読んだりできる場、ワークショップやトークイベントの開催、アート作品の展示やポップアップストアで物販できるスペースetc.アイディアはいろいろあります。単に飲食だけではなく、新しいことにチャレンジしたり、ワクワクする空間、デザイン性に富んだイベントが開催できる場として整備することで、「行きたい！」と思える場所になるのではないかと捉えています。

常設カフェは一つのゴールですが、それ以上に大事なことは、このプロジェクトを通して、利府の町全体のデザインやアートの重要性を認識し、利府に暮らす人たち自らが街を創造する機会にしたいというのが鈴木さんの構想です。まずは月1回程度、簡易的にテーブルとベンチを持ち出し小さな空間づくりからスタートしてみると、少しずつ共感者が増えてくるのではないかと目論んでいます。

文　松浦康生

PROJECT

利府焼開発

アトリエ陶の泉
須田聡宏（すだ あきひろ）さん

利府焼を
町の文化・町の財産に

美術教員だった須田さんは2011年に独立し、利府町菅谷台のアトリエ陶の泉で陶芸教室を開いています。利府焼のはじまりは、教室の生徒から「梨木の剪定した枝を燃やした灰を釉薬に使えないですか」と提案されたことがきっかけです。さっそく利府梨の農家さんから灰をいただき試作したところ、見事に梨の実のような黄色い色合いの器ができたのです。梨灰は、高温でも溶け落ちせず安定した釉薬として使いやすいことも分かりました。これまで剪定した梨の枝のほとんどは廃棄されていたのですが、梨灰としての活用が可能になりました。

こうして梨灰を器に掛けて焼成した陶器を「利府焼」と名付け、町内外に広める活動をしています。

また、須田さんは、tsumikiのこ・あきない市に出店したり委託販売を行う中で、町内で活躍する陶芸作家たちと出会いました。2021年にはtsumikiを会場に、それぞれが梨灰を使った作品を発表し展示販売する「4人展」を開催。一方アトリエでは、陶芸やいろいろな作家さんが集まる「アート展」、イオンモール新利府南館では電動ロクロ体験会、リフノスでの陶芸教室など、気軽に陶芸やものづくりの楽しさを体験してもらう企画も数多く実施しています。

須田さんは、利府焼を町の文化・財産として受け継ぎ残していきたいと考えています。そして、「利府町＝利府焼」となるまで頑張りたいと意欲満々です。もっと町内の方にも認知され、全国的にも利府焼を広めたい。町内外の美術家を集めたアートフェアもやってみたいと夢が膨らみます。今年は利府町を飛び出し、夢メッセ（仙台市）で開かれる全国焼き物フェアにも利府焼を出展します。今後の展開が楽しみです。

文　保科千尋

PROJECT

復刻版 利府町寺子屋

NPO法人リフ超学校
名取俊輔（なとり しゅんすけ）さん

熱い志で、
利府町に寺子屋を復活

名取さんは利府町役場職員として勤務する傍ら、NPO法人リフ超学校の一員として、公私ともに利府のまちづくりに積極的に参加しています。宮城教育大学の出身ということもあって、子どもたちの学びの場づくりに熱心に取り組み、利府町寺子屋プロジェクトのリーダーとして企画・運営に携わっています。

寺子屋の活動は、「活動拠点としての集会所の利活用」をテーマとした利府町市民活動研究会のディスカッションから生まれたプロジェクトです。寺子屋を始めた背景には、子ども会の活動が希薄になると共に減少する地域の交流機会を創出したいという想いもありました。

新型コロナウイルスの影響で子どもたちの集まる場所の確保が難航し、スムーズな活動開始とはいきませんでしたが、2023年2月からようやく寺子屋運営が軌道に乗り始め、すでに地域の子どもたちからも親しまれ利用されています。現在は、町内の野中一部公民館を拠点として、主に利府第三小学校の子どもたち対象に月1回ほど運営し、学習指導以外にも、なぞ解きや工作など、子どもたちが楽しめるコンテンツを提供しています。

名取さんは、「寺子屋を通じて、地域の多世代交流や子どもたちの地元への愛着心を育てていきたい」と将来を見据えています。また、継続的な運営のためには人材や資金の不足など解決すべき課題も多くありますが、「できることからひとつずつ取り組んでいきたい」とその意気込みを語ります。充実した企画実施のためには、やはりマンパワーが必要です。「寺子屋の活動を応援したい」「運営に興味がある」「ボランティアをしたい」という方は、ぜひ名取さんに声をかけてみてください。

文　佐藤由崇

審査員 講評

審査員は、地域づくり、地域プロデュース、商品開発等さまざまな分野で活躍する3名。

❶ 地域性	❷ 新規性・独創性	❸ 自発性	❹ 実現性・継続性	❺ 将来性

5項目を基準に、審査が行なわれました。
非公開で行うことが多い審査会ですが、今回はすべてオープン形式で行われました。応募者たちは、審査員による協議の過程を共有したことで、多くの気づきとヒントが得られたようです。

全体講評

100点を目指してしまうと難しいですが、いま出来るコトを積み上げながら目標とするところにたどり着けばよいと思います。まずは出来るコトをやってみる。うまくいかないコトは、つどつど修正を繰り返しながら進めていくことが大事です。アタックし続けていれば、応援団は現れます。今回ご縁があって出会った方々の間で生まれた新しいコトが、利府の新しいムーブメントになっていくことを期待しています。

亀山貴一さん
一般社団法人はまのね
代表理事

震災によって壊滅的な被害を受けた蛤浜を再生するため、2012年3月に蛤浜再生プロジェクトを立ち上げました。牡鹿半島の持続可能な集落づくりを目的として、caféはまぐり堂、マリンアクティビティー、水産業・林業・狩猟の6次産業化、関係人口の創出などに取り組んでいます。

全体講評

観光、まちづくり、アート、教育といろいろな分野からの提案があり、皆さんの熱量を感じる発表でした。ビジネス系の提案、地域課題系の提案のどちらか一方に偏ることなく混ざり合っていたことは特徴的でした。今後、プロジェクトを発展させていく上で、意気投合した人と進めていくのもよいのですが、tsumikiが持っているリソースを活用し、戦略的に違った視点を持った人たちとチームを組んでみるのもよいと思います。

清水真介さん
合同会社ホームシックデザイン
代表

2010年に盛岡へ帰郷し、クリエイティブディレクターやプロデューサーとして活躍。盛岡市のプロジェクト「盛岡という星で」など、ブランディングやコンサルティングの視点から様々なデザインやプロジェクトに関わっています。

全体講評

個人的にやりたいことを貫いてください。そうすればその想いに共感してくれる人は必ずいるはずです。自分がやりたいこと、自分が楽しくてワクワクすることをやっていくことがとても大事です。利府町の皆さんは、ゼロを100にできる可能性を秘めていると感じました。地域内でつながることも大事ですが、それにプラスして外の視点入れてみてください。もっとおもしろい科学反応が起きるのではないでしょうか。

浜出理加さん
株式会社グリーディー
代表取締役

2017年から東北素材と人材を活用したアロマ製品の開発を行っています。2018年に国際女性デーイベントHAPPY WOMANFESTA MIYAGIを主催。多くの女性のマネジメント経験を活かし2020年一般社団法人ワンエムイノベーション設立し活動しています。

地域のモデルとなる取り組みとして、tsumikiでサポートを続けます。

桃生和成
一般社団法人Granny Rideto 代表理事
tsumikiディレクター

十符の里びと

20人目

-お名前

シンガー夢乃さん

-なにをしているひとですか？

幅広いジャンルで活躍するシンガーです。

全力で「夢」を追っかける 宮城・利府はわたしの原点

利府町花園在住。高校在学中からシンガーとして、CM・TV番組テーマソングなどに起用され活躍しています。2019年度には宮城県産米を全国にPRする活動を行う、宮城米キャンペーンキャラクター「みやぎライシーレディ」に選ばれ宮城米をPR。一方で2019年からは利府町観光大使にも任命され、観光イベントやYouTubeなどで利府町の魅力をPRする活動を精力的に行っています。

小さい頃からの好きが高じて、才能を発揮

利府町生まれの利府町育ち。シンガーとしての仕事のほか多方面で活躍する夢乃さんの幼少期は、「ダンスの道に進みたいと思っていた」と話すほど体を動かすことが大好きだったそうです。小学生の時は韓国アイドルに憧れ、同級生とグループを組んでダンスと歌に明け暮れていたと振り返ります。

そんな夢乃さんに転機が訪れたのは、中学2年生の時。お姉さんと通い詰めていたカラオケボックスで開催していた大会に、たまたま参加したことでした。その大会は、ソニーミュージックが主催する「東北限定コンテスト東北のスターをさがせ！」と銘打った新人発掘オーディションだったのです。見事決勝戦へ進出し、2014グランプリを受賞。その特典として、東京で歌の勉強をすることになりました。レッスンを受ける中でアイドルやシンガー、ダンサーなど本気でプロを目指す人達と出会い、大きな刺激を受けたそうです。「歌を本気でやっていこう！」と心に決めたのは、この頃でした。

東京と利府を往復する生活がスタート。平日は学校、週末は東京へ、自身の目標に向かって学業とレッスンを両立する日々が続きました。「自分が決めたことをただひたすら一生懸命にやることを貫きました」と夢乃さん。学校の先生や同級生、友達には活動のことは打ち明けていませんでしたが、家族は一度決めたことはやり通す頑固な性格を分かっていたのでサポートしてくれたそうです。

音楽と真摯に向きあい、シンガーとして飛躍

中学3年生の頃、東京・仙台を拠点に活動していたサウンドクリエーター（映像音楽作家）の長登隆宗さんと出会い、夢乃さんの人生は、再び大きく変わります。長登さんから音楽を学び背中を押してもらったことで、シンガーとしての夢は大きく前進していきます。自分が歌を歌うことによって、応援してくれる人が笑顔になり、お客さんにパワーを与えられること。そして自分が立つステージは多くの人の支えによって成り立っていることを改めて実感するようになったのです。歌が持つ大きな力と、関わる人への大きな感謝が生まれていきました。活動拠点を仙台に移したのもこの頃です。音楽と真摯に向き合う覚悟を深めた夢乃さんは、精力的に音楽活動に邁進しました。

2018年には長登さんが作詞作曲し、夢乃さんが歌う「For The Future」が七十七銀行のCMソングに決まり、お茶の間に夢乃さんの歌声が届く機会が増えていきました。高校3年生で進路を決断する頃、「さらなる自分の可能性にチャレンジしたい」と2019年度みやぎライシーレディに応募し見事合格。シンガーとしてのキャリアも重ねながら、MCなど人前で話すことや、今までにない仕事が増えていきました。同じく2019年4月には、シンガーとしての活動が評価され、「利府町観光大使」に任命されました。夢乃さんの活動が大きく飛躍し始めた矢先、二人三脚で音楽活動をしていた長登さんが急逝。2019年7月、突如訪れた別れでした。

支えてくれた人たちへの感謝と子どもたちに「夢」を

夢乃さんは落胆し、人前に出ること、自分のすべてを歌に表現することが難しくなった頃「もうシンガーを辞めよう」とまで考え、ボイストレーニングを受けていた恩師のもとを訪れました。すると、そんな気持ちを汲み取って「歌のインストラクターをしてみないか」という提案がありました。全くの新しい分野の仕事。自分が教える側になることは、予想外で大きな不安もありました。「でも、こんなチャンスはもうないかもしれない」と思いきって新たな世界へ飛び込み、アーティストを目指す若者たちを相手に、ボーカルインストラクターとしての道を切り拓いています。現在、小学1～6年生のキッズクラスを受け持っていますが、いつでも全力投球。授業があった日は、ぱったり寝てしまうそうです。

夢乃さんは、「地元に変わらず応援してくれる人たちや家族が待っているという支えがあったからこそ、全力で邁進することができた」と振り返ります。生徒たちの姿は、様々なチャレンジをしてきた自分自身と重なり、いままで得てきたことを体現したいという思いが強くなってきたといいます。利府町観光大使の仕事に打ち込むのもその一つ。小さい頃から自分の夢に向かって努力を惜しまず突き進む夢乃さんの姿は、子どもたちの「目標」となり「夢」となっていくことでしょう。

取材・文 大宮紗妃

-アーティストの情報

シンガー夢乃

Twitter @non_xxx1030
Instagram @_yumeno_official

利府町で暮らす面白い人を毎号ひとりずつ紹介していきます

十符（とふ）とは？ …… 昔、利府町の湿地帯には、良質な菅（スゲ）草が自生し、「菅薦（スガコモ）」と呼ばれる敷物が作られていました。その菅薦の編み目が 10 編あることから「十符の菅薦」と呼ばれ、みちのくの「歌枕」としてもうたわれていました。これが、「十符の里」「十符の浦」と呼ばれるようになり、十（と）が利（と）に、符が府に変わったと言われています。

from RIFU-CHO CHALLENGER

今回ご紹介するのは、利府町に昔から伝わる伝説を題材とした絵本を制作した絵本サークル「りふdeおは梨」代表の西方日鶴さんです。

— CHALLENGER

絵本サークル「りふdeおは梨」 西方日鶴（にしかた ひづる）さん

利府の伝説や民話を絵本に

町内の小学校で読み聞かせのボランティア活動していたお母さんたちと「りふdeおは梨」を結成し、利府に昔から伝わる伝説をもとに『平田五郎』と『猫の宮』の2冊の絵本を作りました。1冊目は、利府町神谷沢地区にある延慶の碑を持ち上げたと言われる怪力男で伊達政宗の家臣「平田五郎」の伝説。2冊目は、長年語り継がれてきた心優しき猫を祀った「猫の宮」の民話です。いざ絵本作りに取りかかると町の教育委員会や郷土史会にも詳しい資料がなく、利府町（村）誌に書かれてあった数行の記載をもとに、町内の住職さんや伝説にゆかりのある方にお話を聞いたりしながら、約1年半かけて自分たちの力で調べました。お宮を探すために山の中に入ったり、利府町を飛び出して仙台や古川に調査しに行ったり、まるでロールプレイングゲームのような感じで制作が進んだそうです。

「平田五郎」展示の様子

コロナ禍の子どもたちにお母さんパワーを

絵本を作るきっかけは、新型コロナウイルスが蔓延してから小学校での読み聞かせ活動がなくなってしまったこと。ボランティア仲間と話しをする中で、歴史的な活動が盛んな塩竈市や多賀城市と比べ、利府町には伝説や歴史ある話やそれらを伝える活動が少ないことに危機感を感じたことでした。そこで絵本の形にして子どもたちに届けたら、地域の歴史や神社・仏閣などに興味を持ってもらえるのではないかと考えたのでした。

子どもたちと作った絵本をもっと多くの人へ

できあがった絵本『平田五郎』は、町内の小学校、幼稚園、保育園、子育てセンター、図書館等に寄贈してあります。『猫の宮』の絵は、子どもたちが描いているので、その努力の結晶をより多くの方に見てもらいたいと原画展を行っています。これまで、リフノスはるフェスタの会場、ごんきや終活プラザ、tsumiki館内などで展示しました。西方さんに次の作品の構想を伺うと、「仕事や子育てをしながら活動しているメンバーが多いので、しばらくはお休みし充電したいです」という答えが返ってきました。パワーアップした活動再開に期待したいです。

取材・文 松岡颯斗

tsumiki セレクトショップで販売中

絵本『猫の宮』
2,000円（税込）

“郷土愛を子どもたちに！ パワフルお母さん's の頼れるリーダー”

— INFORMATION

絵本サークル　りふdeおは梨
rifu.de.ohanashi@gmail.com
Twitter @deohanashi

tsumiki COLUMN

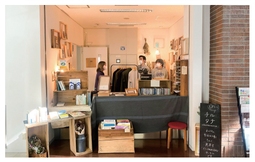
「ある」ものが「ない」 「ない」ものが「ある」 インフォメーションセンター「チルタナ」

桃生和成
一般社団法人Granny Rideto 代表理事／tsumikiディレクター

4月10日、利府町役場1階に6月末まで期間限定のインフォメーションセンター「チルタナ」をオープンしました。チルタナには、私たちの生活や仕事をちょっと見直すきっかけとなる情報を揃え、書籍、冊子、チラシ、雑貨、衣服等を自由に閲覧することができます。「チルタナ」で扱っているものはすべて情報です。

「ある」ものが「ない」、「ない」ものが「ある」のがチルタナの特徴。例えば、利府町内のイベントや観光情報は扱っていません。町内の公共施設に行けば当たり前の手に入る情報はあえて置かず、その代わりに町外、県外のお店やイベントの情報を揃えました。書籍や雑誌も町内の図書館等にはあまり置いていないラインナップにし、物販イベント時の商品も町外のものを取り扱い、全国の取り組みを知っていただく機会としました。利府町内にすでにあるものの「情報」は置かず、ささやかな提案として「利府町内に今はないけど、あったらいいな」と思うようなものを並べました。

チルタナは、「チル（ゆっくり）＋オルタナ（もう一つの）」を組み合わせた造語です。気兼ねなくゆっくりと過ごせるように、物販イベントの時以外は無人のセンターとしました。情報のシャワーを浴びるような空間の中から、ひとつでも生活や仕事のヒントになる情報を持ち帰っていただけたなら幸いです。



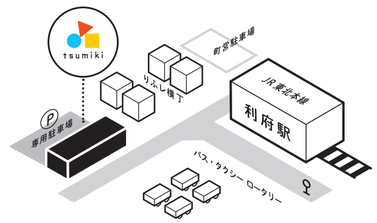
「チルタナ」の情報はインスタグラムからご覧ください。
@chillternative2023

tsumiki
利府町まち・ひと・しごと創造ステーション

利用時間
9:30-17:30
（水・金曜日は21:00まで開館）

休館日
火曜日・年末年始

〒981-0104
宮城県宮城郡利府町中央 1-5-2
TEL　022-766-9231
FAX　022-766-9232
Email　info@rifu-tsumiki.jp



設置者　利府町（商工観光課シティセールス係）

利府町では、地方創生に向けて良好な住環境に「ワクワク感」をプラスした魅力的なまちづくりを進めています。起業・創業や「利府ならでは」のシティセールス政策や、移住・定住施策などに取り組んでいます。

管理運営（業務委託者）　一般社団法人Granny Rideto

Granny Rideto（エスペラント語）は、日本語で「おばあちゃんの笑顔」と訳します。これから高齢化社会を迎える中で、おばあさんになっても笑顔で暮らせる社会をつくりたいという意味が込められています。同時に「Granny」には「おせっかい」という意味があり、地域のおせっかいをやく役割を担うという意志が込められています。

公式ウェブサイト	Twitter	Facebook	Instagram
rifu-tsumiki.jp	@rifu_tsumiki	〈tsumiki〉で検索	@rifu_tsumiki

「つみきのキモチ」は、利府町内を中心に隣接する市町村の公共施設、カフェ、店舗などで配布しています。

つみきのキモチ vol.21　発行日●2023年7月1日　発行●利府町　企画●一般社団法人Granny Rideto
編集●葛西淳子・桃生和成（一般社団法人Granny Rideto）　デザイン●伊瀬谷美貴（interagire）